

明治大学博物館 商品部門收藏資料紹介

漆 器

古代



国宝 片輪車 蒔絵・螺鈿 手箱
東京国立博物館蔵



重文 獅子 螺鈿 鞍
東京国立博物館蔵

中世

近世



国宝 八橋 蒔絵 硯箱
尾形光琳作 東京国立博物館蔵

しっとりとした漆黒の美しい艶。金や貝殻の真珠層で飾りたてた漆器は、時代を彩る日本の文化遺産として数々の名品が生み出されてきました。



庶民の食膳においても、古くから漆塗りの椀が用いられてきました。生命の源となる“食”をともにする器として格別な存在でした。



常設展示「商品」のルーツは、商学部教員の研究グループが1951年に設立した資料室にさかのぼります。

当初は商品の原材料標本類と貿易商品のサンプルを収集しますが、1950年代の末から漆器や陶磁器、染織品、郷土玩具など地方物産品の収集を始めました。

1970年代前半、収集・展示の対象を伝統的手工業製品（伝統的工芸品）とする方針を採用しています。

合成漆器の登場

1957年収集



(左)フェノール樹脂製汁椀
(右)ユリア樹脂製汁椀
(前)ユリア樹脂製模様入箸

1957年度収集

カシュー塗料をほどこすための初期の合成漆器素地としてフェノール樹脂、ユリア樹脂が利用された。

前者は歴史上最初のプラスチックで、今日では百年以上の歴史を持つ。製品は社名に由来する商標「ベークライト」の名で知られた。

第2次大戦後の人口増加と生活復興にともなう旺盛な消費需要に、手作業と天然漆による漆器生産は応じることができなかった。

1950年(昭和25)には、カシューナッツの殻から採った油を石油化学製品に合成したカシュー塗料が誕生した。それをを用いた合成漆器は1951年に製品化され、1950年代後半には本格的な生産が始まった。プラスチック素地の自由な成形性とカシュー塗料のスプレー吹付・電熱乾燥によって食器の大量生産が実現した。

一方、経済の好況下において、漆器は高付加価値商品として発展を見る。合成漆器は入手しやすい価格で日常生活を支え、“椀”という食器文化を身近なものたらしめている事実は否定できない。

高度経済成長期の漆器製品

1958～1967年収集



香川漆器 象谷塗 盆 香川県 1960年度収集

長屋住まいや2DKの団地生活に別れを告げ、一戸建て住宅が普及し始めると、住まいの一画には座敷がしつらえられるようになる。

来客をもてなすための茶器と、それをほこぶお盆は、少し見栄えを意識した実用品として普及するようになった。



八雲塗 南天文漆絵 茶托
島根県 1965年度収集

家庭用の調度品を代表したのが花器である。座敷の床の間や応接間のサイドボード、玄関の靴箱を飾った。

慶事や新築祝いの進物などに需要があったが、近年のマンション生活では床の間のついた座敷も少なくなり需要を大きく減らしている。



黒江塗（紀州漆器）蟬色花器
和歌山県 1967年度収集



津軽塗 唐塗り 菓子鉢 青森県 1958年度収集

座卓の上で用いられた菓子鉢は、盆と同様に慶事の引き出物などに需要があった。

今日、家庭での来客接遇の機会は減り、居間でちゃぶ台やコタツを囲んでの一家団欒の風景も少なくなった。生活スタイルの変化は漆器製品の需要にも影響を及ぼしている。

バブル経済期の漆器製品

ハレの器 漆器 = 高級品、のイメージ



輪島塗 金蒔絵 屠蘇器揃 石川県 1990年前後

原材料費や職人の工賃の上昇を吸収すべく、高価格化・高付加価値化という傾向が生まれ、バブル経済まではなんとか需要が追いついた。

金蒔絵による華麗な装飾はため息が出るほど美しいが、「漆器 = 高級品」のイメージにより、庶民の生活からは縁遠い存在となったことも否定しがたい。



輪島塗 金蒔絵 煮物椀
石川県 1990年前後

重箱や煮物椀は、家庭経済の向上とともに正月のハレの器として庶民の家庭にも備えられるようになったが、1990年代の「失われた10年」を経て、すっかり縁遠いものとなってしまった。

ハレの器 漆器 = 高級品、のイメージ

輪島塗 金蒔絵 重箱
石川県 1990年前後

おせち料理も百貨店の地下食品売り場や通信販売による購入が増え、合成漆器やスチロール樹脂の箱に詰められるようになった。

比較的伝承性が保持されているハレの生活スタイルにおいても明らかに変化は起きている。



ハレの器 漆器 = 高級品、のイメージ



(左)ABS樹脂・PET樹脂製ウレタン塗装 汁椀

(右)木粉・フェノール樹脂製ウレタン塗装 汁椀

2005年度収集

現在、汁椀として最も普及している合成漆器としてポピュラーな製品。我々が“漆器”と思って使用している最も一般的な製品かも知れない。



プラスチック製使い捨て容器 1990年代

これら使い捨て容器や弁当容器の色は、伝統的な実用漆器の色使いを模している。

仕出し弁当の容器となると金蒔絵をモチーフとしたものも見かけられ、伝統的な漆器への志向性は失われていないことを示している。

一方、飲食店では陶磁器の碗で味噌汁を出すような例もあり、伝統的な食器観が変わりつつあることも間違いない。

漆器の付加価値を考える

漆器は一般的には実用をもっぱらとする日常用品からはすでに性格を変じたと言える。手作業により天然漆を使う漆器は、高い品質やデザイン性をそなえた高付加価値商品となった。

材料・製法によって品質・性能、ひいては価格に差がつく商品のジャンルとして、酒類などの嗜好品、自転車・自動車やオーディオ機器など趣味性の高い商品、あるいは高級ブランドを有する商品のジャンルに類するものとして考える必要がある。

ここでは、合成漆器との比較も含め、漆器の付加価値について考える材料を提供したい。

漆器が高価である理由として、漆塗料自体の値上がりや手数をかけた加飾もあるが、製造工程の内、完成された商品からは想像しにくい下地・中塗工程の存在がある。

しかし、これらの工程は漆器が高性能であるために重要な役割を果たしている。



木地見本
2003年度収集

椀木地のもっとも弱い部分は薄い口縁部と年輪が真上を向く“見込み”の部分である。まず、この部分に麻布あるいは木綿の布を漆で貼り付けて補強する。



布着せ工程見本
2003年度収集

輪島塗の場合、珪藻土を焼いて粉末化した“輪島地の粉”と生漆・米糊を混ぜたものを塗って布地との段差を解消するとともに、さらに塗り重ねて研ぐ作業を最低3回はおこなう。

これによって、星砂状の地の粉ががっちりと器面を固める。



下地工程見本
2003年度収集



中塗工程見本
2003年度収集

表面を滑らかに処理した後、中塗り漆をかけては研ぐ作業をおこなない塗膜に厚みをもたせる。

下地・中塗は非常に手数のかかる作業であるが、これによって比類のない耐久性や断熱性が得られる。逆にここで工程を簡略化してしまうことにより、低価格化が可能となるが、当然、品質を下げることにつながる。

伝統漆器と合成漆器の比較

| | 伝統漆器 | 合成漆器 |
|-------|-----------------------------|------------------------------------|
| 原料 | 天然原料 | 石油・石炭化学製品（天然原料と併用される場合もあり） |
| 製法 | 手工業（一部、機械の利用あり） | 機械工業 |
| 生産効率 | 低い | 高い |
| 価格 | 高い | 低い |
| 付加価値 | 高い | 少ない |
| 耐久性 | 使用法によれば20年・30年を越える長期の使用に耐える | 完成した瞬間から劣化が始まる 品質改良によって耐久性は向上しつつある |
| 断熱性 | 高い | 低い |
| 安全性 | 有害物質の溶出なし | 有害物質の溶出を規制 |
| デザイン性 | 芸術性の付加も可能 | 付加される傾向にはない |

漆の魅力



漆の椀

- ・ 美しい色艶
- ・ 手にした際のバランスのよさ
- ・ 滑らかな口触り
- ・ 塗り直しによりいつまでも使える

漆の木の樹液は、成分中の酵素（ラッカーゼ）が空気中の酸素によって活性化され、ウルシオールが重合が進んで固化してゆく。

漆の魅力



漆の弁当箱

- ・寒い時期には保温性
- ・暑い時期には殺菌性
- ・水気を吸うのでご飯がべとつかない

その化学反応はゆっくりとしたもので、すでに生活の中で使われている最中にも止まることなく進んでいる。その意味で… 漆器は生きているのだ。

商品開発の新しい動向

バブル景気が終わりを告げた1991年以降、高級消費財の需要は低迷した。傷つきやすい、壊れやすい、取り扱いが面倒という誤った認識によっても人々の“漆器離れ”は顕著となった。

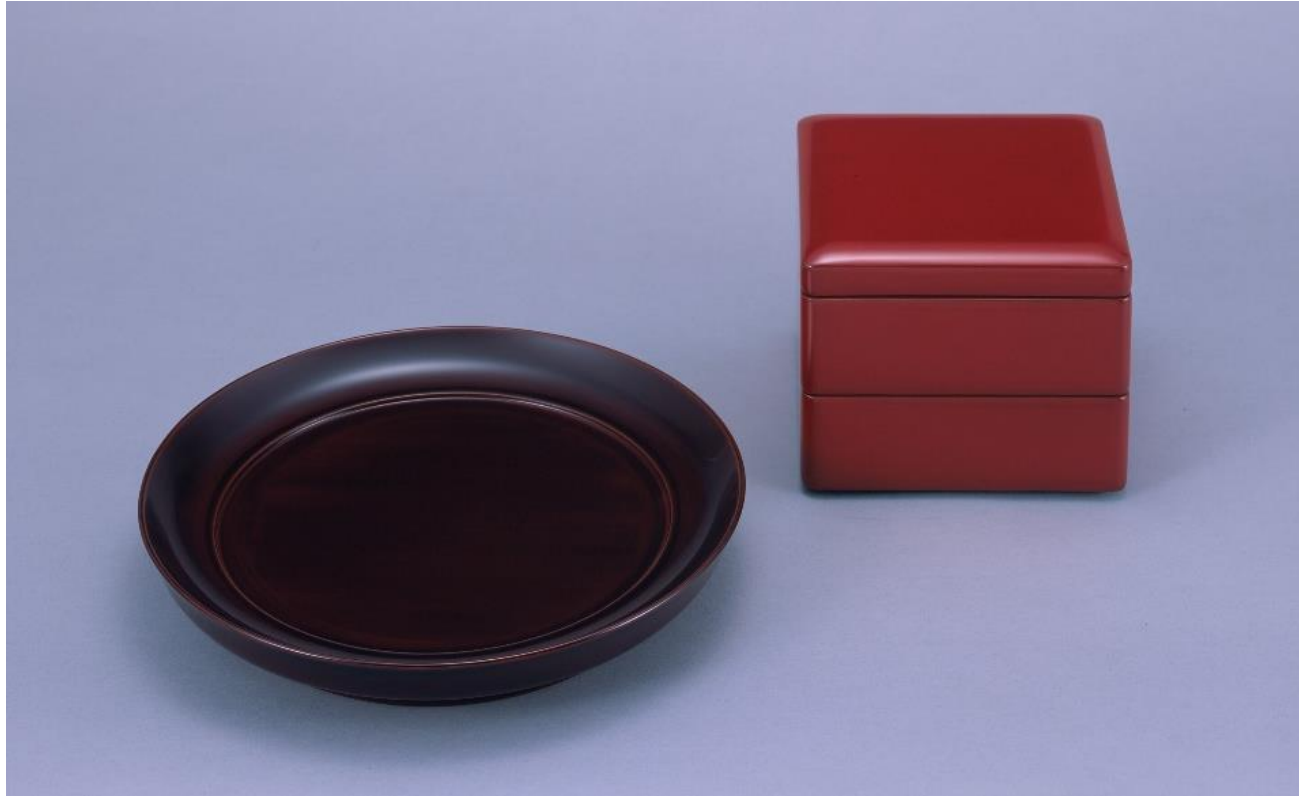
こうした中、新しい商品開発の動向が出てきた。

「本物の漆」「暮らしの器」「新しい使い方」「作り手と使い手の対話」といったコンセプトによる、メーカー・職人・専門店経営者・漆器愛好家によるムーブメントである。

これらの商品群の特徴は、加飾からは距離を置き、漆が塗られていることを実感できる製品を目指している点にある。

したがって、黒・朱のカラーで多用途に用いられるシンプルな器形が共通のイメージとなっている。

かつての浄法寺椀は、菱形の金箔と漆絵の雲形文という強い装飾性が特徴で、庶民向けには内朱外黒塗りの器もあった。



浄法寺塗 岩館 隆作 岩手県 1995年度収集
(左)盛り皿 (右)姫重

光沢を抑えた朱塗りと、朱の中塗りの上に素黒目漆をかけた溜塗りは、漆塗りならではの色合い。

天然漆の持ち味を生かしたシンプルなデザインの先駆けとなった。



山中漆器 喜八工房(株式会社酢谷)
石川県 2010年度収集
(左)黒ふき漆薄挽鉢
(中)ロングライフお好み椀
(右)日用椀

高度成長期における「漆器 = 高級品」「高級品 = 金蒔絵・沈金」というステレオタイプ化によって、輪島塗や金沢漆器と似通ったイメージになってしまった山中漆器だが、本来の持ち味は高い技術に裏付けられた繊細な木地加工にあった。



山中漆器 喜八工房(株式会社酢谷)
石川県 2010年度収集
(左)黒ふき漆薄挽鉢
(中)ロングライフお好み椀
(右)日用椀

そのイメージを重視するため木目をあえて目立たせるなど、天然木の加工が理解しやすいデザインを採用している。「日用椀」はあえて精緻な仕上げをせずに価格を下げ、日常使いの中で漆塗りを実感できるようにというコンセプトを強く打ち出した。

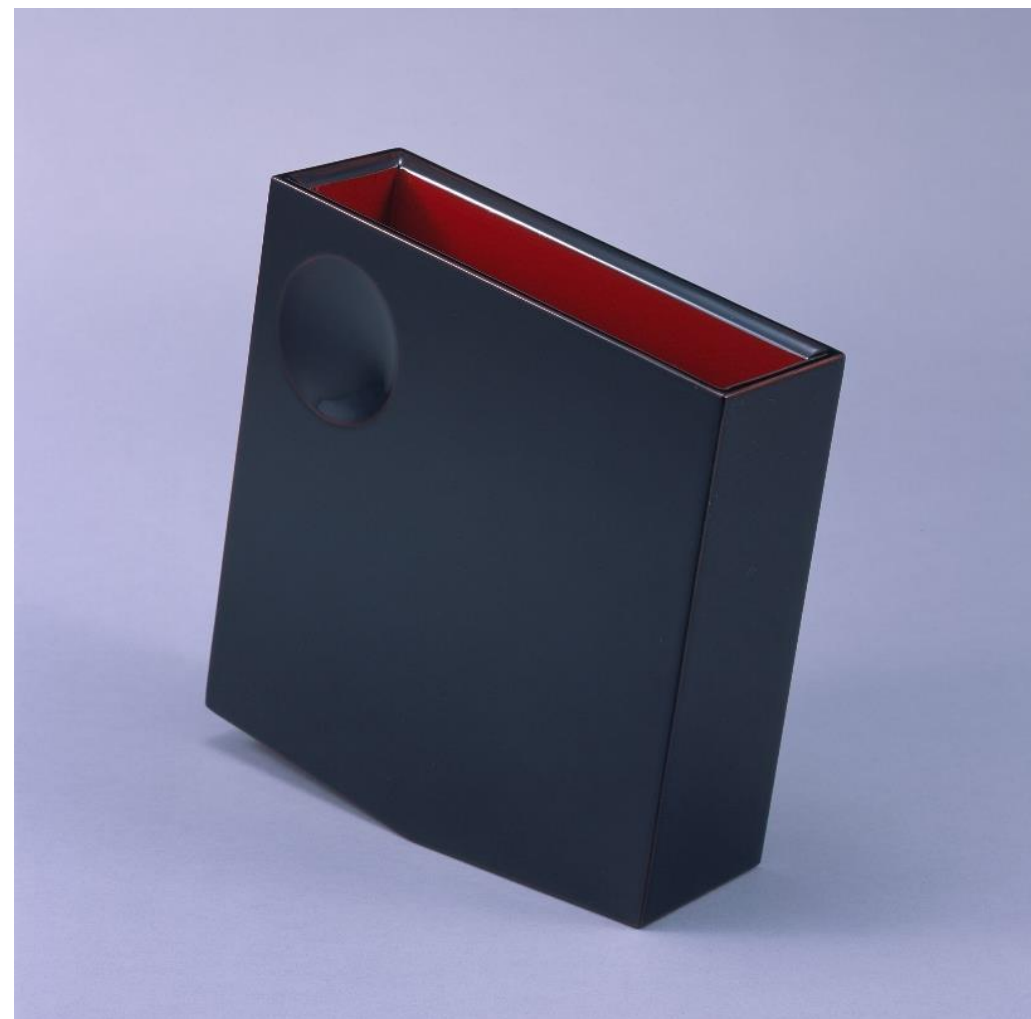


イタリアデザイン漆器 秋田県 2010年度収集
(左)波紋小鉢
(右)コーヒーカップ+ソーサー+スプーン

イタリア在住デザイナーと川連漆器（秋田県）の伝統工芸士の連携により1998年から開発が進められ、2000年2月にミラノで開催された国際的な家庭用雑貨・ギフト用品の見本市「マチェフ」に出展された商品。

この試みは経済産業省や秋田県の助成を受けた。
一見、奇をてらったような感覚ながらも、成形技法や塗り技法は伝統製法の制約を守っている。

イタリアデザイン漆器
秋田県 2010年度収集
花器





イタリアデザイン漆器 秋田県 2010年度収集
(左)椀 (中)スタッキンググラス (右)カップ

熱い飲料を入れる容器であっても漆塗りの断熱性によってハンドルを不要としたことなど、「洋食器の模倣」としてのデザインから抜け出ている部分もある。赤は川連らしい濃い朱漆。オリーブグリーンはイタリアで人気のある色。

石川県輪島市のメーカーによる製品。
金蒔絵・沈金の加飾イメージがとりわけ強い輪島のスタイルから離れる決断をし、天然漆の使用を実感できる实用食器を中心とした商品開発をしている。



輪島塗 輪島キリモト 石川県 2010年度収集

小福皿 片口
スプーン ヘラ模様椀

複雑な3次曲線をえがく片口の注ぎ口やスプーンは、元来、手鉋で木地を削る朴木地のメーカーとして面目躍如である。

小福皿は金属製のスプーンの使用にも耐える性能を求め、へら模様椀はあまり注目されることのない下地工程のへら目をイメージさせるなど、従来とは一味違った商品開発が特徴である。



輪島塗 輪島キリモト 石川県 2010年度収集

小福皿 片口
スプーン へら模様椀

経済が登り坂の時代… 旺盛な需要に対応すべく量産化の手段が導入される中、手仕事は機械製法に置き換わってゆきました。

漆器は“漆”という素材ゆえに近代機械工業に適応できません。

しかし、漆は、我々が近代化の過程において見失っていった価値観を呼び覚ましてくれる存在なのです。

生命の源となる“食”という普遍的な価値をともにする器として、これ以上にふさわしいものがあるのでしょうか。